

鳥の劇場 2007 年春のプログラム 三作品連続上演

「我々をもてあそぶ見えない力」を巡って

<実績報告書>



(7月公演「かもめ」)

2007年5月～7月 毎月第一週の金曜、土曜、日曜

鳥の劇場の鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）にて

[後援] 鳥取県 鳥取市 いんしゅう鹿野まちづくり協議会

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター 新日本海新聞社 鳥取市文化団体協議会

[助成] アサヒビール芸術文化財団 芸術文化振興基金 ごうぎん鳥取文化振興財団

[主催] 鳥の劇場

鳥取市民文化祭参加行事

鳥の劇場

〒680-0833 鳥取市末広温泉町 122-3F

TEL/FAX 0857-23-2224

E-MAIL info@birdtheatre.org URL <http://www.birdtheatre.org>

はじめに

昨年より本格的な活動を開始した鳥の劇場にとって、「2007 年春のプログラム」は、活動を定着させてゆく上で重要な位置を占めていました。鳥の劇場では、作品をつくること、そして劇場という「場」をつくることを不可分なものと捉えており、その両輪の連動によって劇場を地域における文化の拠点とし、演劇が地域社会に不可欠なものであると認知されることを目指しています。その目標を実現してゆくためには、活動を継続的に行ってゆくこと、また行える力があることを示し、理解してもらう必要があります。昨秋の「オープニングプログラム - 4 作品連続上演」に続いて行われた今回のプログラムは、そのための大きな一歩であったのです。

今回のプログラムを開催するにあたっては、いくつかの新たな試みに取り組みました。

「作品をつくる」

- プログラム全体のテーマを設定 ⇒ 『我々をもてあそぶ見えない力』を巡って」というテーマのもと、不条理劇に焦点をあて、我々とこの世界をとりまく「見えない力」について考える
- 上演後にアフタートークを実施 ⇒ 観客の理解を助けるだけでなく、ともに考える機会に
- レパートリー作品の上演 ⇒ 昨年 11 月に上演した『誤解』の再演

「場をつくる」

- 各作品のステージ数を二回から四回に増やし、昼公演も実施 ⇒ 一作品あたりの来場者倍増を目指す



鳥の劇場 - 右手が劇場入口、
左手奥がホワイエ

- ペアチケットを廃止し、すべてのチケットを日時指定とする ⇒ 安価で観劇できる環境を維持しながら、チケット料収入の安定をはかる
- 上演の前後にホワイエにてカフェを開く ⇒ もてなしの空間としての劇場づくりをすすめる
- サポーターの名前をホワイエの壁に ⇒ 本人の希望にそって名前を表示。鳥の劇場がどうやって支えられているかを知ってもらう
- 劇場設備の改善を図る ⇒ 遮光、冷房の設置、雨音対策、劇場入口のスロープ設置など、作品をつくりやすい環境、作品を楽しむやすい環境をつくる

「拠点となる」

- 上演三作品を取り上げての戯曲講座、地元の中学生を招いての上演会 ⇒ 上演プログラムと連動しての普及活動
- 鹿野町との協力関係を深め、鳥の劇場と地域の「観光」の連動をはかる ⇒ 芝居の観客が鹿野町を知り、鹿野を訪れる観光客が劇場に足を運ぶ、そんな循環への足がかりを探る
- 文化の情報発信を行う ⇒ 鳥取県内外の芸術関連施設に向けて積極的に鳥の劇場の情報を告知する一方、他の文化拠点や公演、展示会などパンフレット、チラシ等をホワイエに置き、劇場を情報発信の場所に



さあ、ホワイエから劇場へ

以下、これらの取り組みを中心に、今プログラムを振り返ります。

※本報告書中のすべての写真撮影：米井美由紀

上演作品について

<5月公演>

「部屋」「料理昇降機」

作：H・ピンター 演出：中島諒人

5月4日（金・祝）19:00／5日（土・祝）13:00・19:00／
6日（日）13:00

出演：

「部屋」村上里美、中川玲奈、赤羽三郎、西堀慶

「料理昇降機」齊藤頼陽、西堀慶

照明：齋藤啓 音響：村上裕二 装置：赤羽三郎

舞台美術・選曲：中島諒人 演出助手：葛岡由衣

ピアノ演奏（「シャコンヌ」）：大野日菜 制作：中島佳子



2005年にノーベル文学賞を受賞したイギリス人作家の初期の作品を二本立てで上演。「難解」という感想が多く聞かれましたが、「わかる、わからない」を超えてどう本質的な「深さ」にたどり着けるのか、得るものの多い挑戦となりました。



「料理昇降機」より

<6月公演>

「誤解」 作：A・カミュ 演出：中島諒人



6月1日（金）19:00／2日（土）13:00・19:00／3日（日）13:00

出演：中川玲奈、中村きくえ、齊藤頼陽、村上里美、西堀慶

照明：齋藤啓 音響：村上裕二 装置：赤羽三郎 舞台美術・選曲：中島諒人

演出助手：葛岡由衣 楽曲提供・選曲・バイオリン演奏：武中淳彦

制作：中島佳子

初のレパトリー上演。人間の存在を鋭く問うカミュのこの作品は、昨年11月の上演でも好評を博しました。観客数は伸び悩みましたが、前回の上演を観た観客から「新しい発見があった」という声が多く聞かれ、再演を通して作品を育てる意義を改めて認識させられました。



<7月公演>

「かもめ」

作 A・チャーホフ 演出 中島諒人

7月6日(金) 19:00/7日(土) 13:00・19:00
/8日(日) 13:00



出演：増谷京子、葛岡由衣、赤羽三郎、中川玲奈、齊藤頼陽、西堀慶、村上里美、武中淳彦

照明：齋藤啓 音響：村上裕二 装置：赤羽三郎 舞台美術・選曲：中島諒人

演出助手：中村きくえ、中川諒也、横山絵理香 楽曲提供・選曲・バイオリン演奏：武中淳彦
ピアノ演奏：大野日菜 制作：中島佳子

ロシアの文豪チャーホフの代表作。リアリズムの作品として語られることが多いこの戯曲に潜む不気味さ、不可解さに迫りました。よく知られた作品ということもあって多くの観客を集め、プログラムの締めくくりにふさわしい公演となりました。

また、初めて休憩（15分）を間に入れて上演を行いました。



<作品の解説など>

- 各作品の上演後に、演出家による解説を行い、観客からの質問などを受けました。(5月公演では、上演前にも作品の説明を行いました。)説明してほしい、という人もいましたが、作品への理解が深まったという声を非常に多く聞きました。

- 前回プログラムに引き続き、ホワイエにて上演3作品の作家を紹介する展示を行いました。



アフタートークの後、実際に舞台へ



ホワイエの展示

観客動員

1) 来場者

「部屋」「料理昇降機」			「誤解」			「かもめ」		
5月4日(金・祝)	19時	149人	6月1日(金)	19時	46人	7月6日(金)	19時	94人
5月5日(土・祝)	13時	94人	6月2日(土)	13時	53人	7月7日(土)	13時	108人
	19時	62人		19時	88人		19時	127人
5月6日(日)	13時	69人	6月3日(日)	13時	88人	7月8日(日)	13時	131人
計		374人	計		275人	計		460人

- ⇒ プログラム合計(延べ) : 1,109人
- ⇒ 1公演あたりの平均来場者数(計3公演) : 約370人
- ⇒ 1ステージあたりの平均来場者数(計12回) : 約92人

前回「オープニングプログラム - 4作品連続上演」(2006年9月~12月)での実績

- ⇒ 総来場者数(延べ) : 1,017人
- ⇒ 1公演あたりの平均来場者数(計4公演) : 約254人
- ⇒ 1ステージあたりの平均来場者数(計10回) : 約102人

※ 9、10、11月公演は各2ステージ、12月公演は鹿のスタジオ(収容人数90人)での4ステージ

2) 観客がどこから来たか(アンケート回答者の住所)

小数点以下は四捨五入

	「部屋」「料理昇降機」	「誤解」	「かもめ」
鹿野町	15%	24%	13%
旧鳥取市、気高町、青谷町	42%	43%	57%
鳥取県内そのほか	21%	21%	23%
鳥取県外	22%	12%	7%
県外来場者の居住都道府県	東京、神奈川、三重、 大阪、兵庫、岡山、鳥 根、広島、高知	東京、千葉、三重、 岡山、鳥根	兵庫、岡山、鳥根、 広島

※アンケート回収率 : 「部屋」「料理昇降機」36%、「誤解」47%、「かもめ」26%

- 1 公演あたりの来場者は、倍増とはいきませんでした。平均で 100 人以上の増加となりました。昼の上演を行ったこと（昼の回と夜の回の来場者数はほぼ同数）、昨年からの活動が県内外で徐々に浸透してきたこと、などが増加の要因としてあげられると思います。
- 5 月「部屋」「料理昇降機」は上演日がゴールデンウィークと重なったため、帰省中の若い世代、鳥取県外からの観客など、初めて鳥の劇場に足を運ぶ観客が多かったようです。
⇒ アンケート回答者中、鳥の劇場を初めて観た観客の割合：「部屋」「料理昇降機」約 58%、「誤解」約 37%、「かもめ」約 38%
- 6 月「誤解」は初のレパートリー作品として再演されましたが、初演、再演ともに観たという人は、それほど多くなかったようです。
⇒ 「誤解」のアンケート回答者中、昨年 11 月の初演を観た観客の割合：約 20%
- 7 月「かもめ」では、知名度の高い戯曲を取り上げての新作であったこと、また 5 月中旬から 6 月にかけて頻繁にメディアで取り上げられたことなどが要因で、来場者の数が伸びたようです。
- 今プログラムでは、初めて平日の夜に上演を行い、ある程度の集客を得ることができました。今後も、平日の上演を増やしてゆきたいと考えています。
- チケットの総売り上げは 1,934,500 円、観客 1 人あたりでは約 1,744 円です。（前回プログラムでは総売り上げ 1,875,000 円に対して単価が約 1,250 円。）ペチケットを廃止したことなどによる効果があったと思われます。



校庭の駐車場 - 県外ナンバーを見かけることも多くなった

宣伝・告知活動

1) チラシ、ポスター

□ プログラム全体のチラシ（右図）は 20,000 部を印刷。内訳は：

- ・ 公共施設、商店などでの「置きチラシ」6,772 部（589 ヶ所）
- ・ 県内外のホール、劇場での「置きチラシ」3,599 部（148 ヶ所）
- ・ 他の公演などで観客に配る「挟み込みチラシ」：6,550 部（約 20 ヶ所）
- ・ DM、招待状などと共に送付 448 部
- ・ そのほか 2,631 部



今回のチラシ配布では、特に中四国地方のホール、劇場への送付に力を入れました。

□ ポスターは各公演ごとに 500 枚製作（5 月「部屋」「料理昇降機」は 200 枚）、鳥取市内を中心に文化施設、商店などに貼りました（340 ヶ所）。ポスターは公演を告知する上で、非常に重要なツールとなっています。また、劇場に来た観客に次回公演のポスターを持って帰ってもらう試みも行いました。

2) 新聞、テレビなど

□ 今回のプログラム期間中に取り上げられた主な記事、番組などは次の通りです。

- ・ 4 月 3 日（火） 日本海新聞：「戯曲の講座」について
- ・ 4 月 4 日（水） NHK ラジオ第一「おはよう中国」：「戯曲の講座」について
- ・ 5 月 3 日（木） 日本海ケーブルテレビ：5 月公演「部屋」「料理昇降機」について
- ・ 5 月 3 日（木） 日本海新聞：春のプログラムについて
- ・ 5 月 3 日（木） 毎日新聞（鳥取版）：春のプログラムについて
- ・ 5 月 26 日（土） 日本海テレビ「鳥取 Why?」：「戯曲の講座」について
- ・ 5 月 28 日（月） 日本海テレビ：「鹿野中学校上演会」について
- ・ 5 月 29 日（火） 毎日新聞（鳥取版）：「鹿野中学校上演会」について
- ・ 6 月 1 日（金） 鳥取県「県政だより」：鳥の劇場の活動について
- ・ 6 月 2 日（土） 日本海新聞：「鹿野中学校上演会」について

このほか、劇団の主宰・中島諒人が毎月連載している日本海新聞「創造都市鳥取を夢見て - 中島諒人の演劇ノート」、毎日新聞「感劇感激」、劇団メンバーを中心に毎週水曜日連載の日本海新聞「鳥の劇場便り - 鹿の国から」も、活動を知ってもらう上で大きな役割を果たしています。

- 今回のプログラムでも、各公演初日の二日前と三日前にプレビュー上演を行いました（5月1日、2日、5月29日、30日、7月3日、4日）。プレビュー上演ではすべてを本番通りに行ったうえで、マスコミ各社に撮影、取材を行っていただきます。実際にプレビューに来たのは、昨秋のオープニングプログラムでは1社（1人）、今回も2社（2人）のみでした。しかし、公演前に作品についての評が新聞などに掲載されることは、公演の宣伝のためだけでなく、観客が多様な視点から作品を観ることを助けます。今後も、プレビュー上演は続けていきたいと考えます。



送迎、託児、カフェなど

(1) 送迎

□ 今回のプログラムでも、最寄の JR 浜村駅と会場の間で、汽車の発着時刻に合わせて送迎車の運行を行いました。ドライバーはすべて鹿野町のボランティアです。観客の大半は自家用車で会場まで来ますが、自動車を利用される方にはこの送迎車は大変好評です。交通の不便さを解消するだけでなく、ドライバーとの会話や車中から見る鹿野の町並みが、劇場体験への導入部と感じられるようです。各公演ごとの利用者（帰りの便のみ）は、以下の通りです。

- ・ 5 月公演（計）：鳥取方面 16 名、米子方面 0 名
- ・ 6 月公演（計）：鳥取方面 19 名、米子方面 5 名
- ・ 7 月公演（計）：鳥取方面 25 名、米子方面 7 名

(2) 託児

□ 上演中に子供を預かる託児は、有料サービスです（子供 1 人 1,000 円、兄弟の場合 2 人目からは 500 円）。ただ、周知がまだ徹底されていないようで、実際に観に来た観客からも、知っていれば利用したのに、といった声が聞かれました。利用者（子供）の数は以下の通りです。

- ・ 5 月公演（計）：0 名 ・ 6 月公演（計）：2 名 ・ 7 月公演（計）：5 名

(3) カフェ

□ 昨年の 12 月に初めて実施し、非常に好評だったカフェ。鹿野で焙煎を行う丸達コーヒーのご協力を得て、今プログラムでは本格的にホワイエにオープンしました。コーヒーの香りが、劇場空間をより豊かな場所に変えたことは間違いありません。

鳥のカフェ、営業中



(4) サポーター名の表示

本人の希望を確認した上で、サポーターの名前をホワイエの壁に書き出しました。鳥の劇場の活動がどういう人たちによって支えられているのか、知ってもらうことが目的です。2007 年度のサポーターは、121 名です。（8 月 6 日現在）

劇場施設の改善

鳥の劇場は、使われなくなった幼稚園、小学校の施設を劇場につくりかえたものです。決して、万全の設備を備えているわけではありません。しかし、活動を継続してゆく中で問題を発見し、それをローコストで解決してゆくことにより、少しずつ劇場としての質を高めてゆきたいと考えます。

今プログラム中には、以下のような改善を試みました。

(1) 遮光

全面が窓の体育館を、銀のシートで覆い、外光を遮断しました。右の写真の通り、外見はちょっと変ですが、これにより昼間の上演が可能になりました。シートを張る作業はすべて、劇団のメンバーが行いました。



(2) 冷房の設置

夏場の体育館は熱気がこもり、非常に暑くなります。扇風機、氷など、様々な暑さ対策を考えて試しましたが、7月公演より、地元の空調専門会社の協力を得て、空調機を2台設置しました。現在は、仮設の発電機によって稼動しています。

(3) 雨音対策

体育館の屋根に激しく打ちつける雨音は、時として俳優のセリフをかき消してしまいます。これに対しては、メッシュのシートを屋根に敷くことで雨粒を細かくし、音を軽減させました。まだ完全ではありませんが、かなりの改善がみられます。

(4) 入口付近のスロープ

今回のプログラムには、毎公演、車椅子で来られる観客がいました。劇場入口付近の段差を解消するため、劇団メンバーが手作りでスロープを作成しました。決して大がかりではありませんが、バリアフリーな劇場への第一歩にしたいと考えます。

関連企画、普及活動

(1) 「戯曲の講座」

- これまでにも好評を博してきた「戯曲講座」シリーズ。今回は、各公演で作品が上演される前に、その上演戯曲をとりあげて作品への理解を深めてもらおうと、「2007 年春のプログラム」関連企画として行いました。取り上げた戯曲および参加者は以下の通りです。
- ・ 「部屋」(作 H・ピンター) 2007 年 3 月 24 日(土) 鳥の劇場の鹿のスタジオ 参加者: 9 名
- ・ 「料理昇降機」(作 H・ピンター) 3 月 25 日(日) 劇団事務所 参加者: 10 名
- ・ 「料理昇降機」4 月 7 日(土) 鹿のスタジオ 参加者: 9 名
- ・ 「誤解」(作 A・カミュ) 5 月 12 日(土) 鹿のスタジオ 参加者: 16 名
- ・ 「かもめ」(A・チャーホフ) 6 月 9 日(土) 鹿のスタジオ 参加者: 10 名
参加者(延べ): 54 名

(2) 「上演会」

- 今回、初の試みとして行ったのが、地元鹿野中学校の全校生徒(159 名)を招いての上演会です。6 月公演「誤解」および 7 月公演「かもめ」の公演前、プレビューの前日にそれぞれ本番と同じ上演を中学生に見てもらいました。この試みには、上演側にとっても新鮮な驚きがありました。今後継続的に行うことで、学習への取り込みなど、成果を深めていきたいと考えます。
- ・ 「上演会」鳥取市立鹿野中学校、2007 年 5 月 28 日(月)「誤解」、7 月 2 日(月)「かもめ」

(3) 小学校でのワークショップなど

- 今回の上演プログラムとは直接関係ありませんが、鳥の劇場では小学生を対象としたワークショップ活動にも力を入れています。7 月公演では、興味を持った小学生が家族とともに劇場にやってくる姿も見受けられました。現在、継続的にワークショップ等を行っている学校は以下の通りです。



- ・ 鳥取市立岩倉小学校: 演劇・朗読クラブの指導
- ・ 鳥取市立逢坂小学校: 全校生徒(52 名)対象、11 月の学習発表会へ向けて(写真)
- ・ 鳥取市立鹿野小学校: 各学年ごとのワークショップ(月 1 回)

地域との連携

鹿野の人々からの協力が鳥の劇場にとって不可欠となっている一方、劇団メンバーが町の行事などに参加したり、実際に町内に住居を移すことなどで、町との関係は確実に深まっていると考えます。そんな中で、鹿野のまちづくり、また周辺地域の観光の中に鳥の劇場の活動を位置づけてゆくことは、非常に重要であると考えます。最初の規模は小さくとも、演劇が社会に関わり、何かを還元できるということを示してゆけるからです。

- 観光といっても、まずは地元に住む人にしっかりと活動を見てもらわなくてはなりません。地元の小、中学校との関わり、そして継続的に活動を行うことで、これまで関心のなかった町民にも少しずつ活動を知ってもらえるようになっていきます。
- 今回のプログラムでは、鳥取県外からの集客という共通テーマのもと、株式会社ふるさと鹿野が運営する「山紫苑」との連携を模索しました。山紫苑に宿泊をして、観劇してゆく鳥取県外からの観客は決して多くありませんが、確実に増えてはいます。担当者と公演ごとに連絡を取り合い、状況把握に努めました。今後も協力関係をより深めてゆきたいと考えます。
- 今後は、鳥の劇場を知らずに鹿野を訪れる観光客に劇場を知ってもらうための工夫、また作品の上演がないときに訪れる人たちにとっても劇場が提供できることはないか、そんなことを考えてゆきたいと思います。鳥の劇場が、公演があってもなくても訪れたい場所になるとすれば、それは文化や演劇の持つ力によるものであり、劇団の活動にとっても大きな成果となるはずです。
- このような鳥の劇場の文化拠点としてのあり方に関して、鳥取大学地域学部附属芸術文化センターの五島朋子さんが調査を行っています。今プログラムでも、各公演ごとにアンケートを実施しました。活動の当事者ではできないこのような学術的な評価も、参考にし、また活用してゆきたいと思います。



終演後、ホワイエにて